

朝

ここは地方都市の公営コート。

ぼんやりと空が白み始めたころ、手にラケット、または肩にラケットバックを持った中年、いや、ほとんどが六十代以上の高齢者が集まってくる。いつのころからか早朝にテニス愛好者が集うようになった。

テニスといえば硬式テニスをさし、軟式テニスはソフトテニスとよばれている。この公営コートは中央のクラブハウス（観覧席）を挟んで北側六面がテニス、南側六面がソフトテニスと一応区別されている。公営コートだけあって三千円程度の年間定期を持っていさえすればこの朝の時間は自由に利用できるが、六十五才以上は寿証が配布され施設利用は無料となるから朝テニス愛好者達のほとんどはこの恩恵にあずかっている。

この公営コートは、プレーができる明るさになればその門扉の鍵を開けて利用でき、その解錠は定期券を申し込むときまとめた各クラブに任されているから、利用者としては願ってもない運用が許されている。

プレーができる明るさ、つまりボールが見えるようになるのは季節によって異なる。夏は4時過ぎ、冬は6時過ぎ。夏の4時過ぎは早起きの高齢者にとってそれ程抵抗がない。しかし、氷点下にもなる冬の6時過ぎはぷつつんと逝かないように毛糸の帽子、手袋、グラウンドコート^{グランドコート}を羽織ってのテニスとなる。

なぜ、それほどまでにと思われるかもしれない。でもこの集団は毎朝のテニスで1日が始まることが勤行（ごんぎょう）のように身につけてしまっている。そして、行かなければ「体調不良か」と勘繰られ、はては「お悔やみ欄には載っていなかったなー、いい人だったなー」などと言われる始末で、つまり毎朝コートに行くことが生存証明そのものと化しているのである。そしてまた、行かないと配偶者からも「今日はどうしたの」と心配され、それゆえ、時間になると、がばっと起きて支度して今日もテニスコートに来てしまうのである。

早朝に集まる人数は少ない時でも四～五名、多い時は十二名以上となる。ほとんど県のC級（誰もがはじめはC級）だが中にはB級、元A級もあり、上手も下手もそれなりにプレーを楽しむことができる。そのプレーはダブルスのゲームが主である。いや、即ゲームといってもよい。ぱっぱっと組を決めラケットを回してサーブを決める。いつからか四ゲーム先取、セミアドバンテージと決まっている。準備不足で起こった怪我は自己責任とばかり4人集まればすぐにゲームが始まる。とにかくゲームがしたいのである。

毎日ゲームをしているのだから互いに手の内は知り尽くしている。得意なショット、不得意なパターン、互いの弱いところをいかにつくか。どうしたら相手の球筋を読み先手をうてるか。シニアのテニスは、10代20代の若者のようなスピンの効いたスピードボールを打てるわけではないから互いの弱みの探り合いである。ロブで体勢を崩し空いたところを抜くショット、短いボールで前に出させてロブやサイドを狙う。適度の運動と工夫はボケ防止にはちょうど良いのだが、ポイントを取って喜び、取られて悔しがる光景は、まるで子ども^{子ども}のようである。その勝敗には今日一日が気持ちよく過ごせるかどうかがかかっているのだ。

そんな朝テニスではあるが、高齢者に忍び寄る記憶の衰え、視力・聴力の低下は、カウンターの失念はもとより、きわどいライン上のジャッジに到ってはしばしば中断し大きな声でイン、アウトを主張し合う。そのシーンには、たかがテニスにと言いたくなるような熱さを見ることもある。そうさせているのは、自らの老いと衰えへのささやかな、いや頑強とも言える抵抗心かも知れないし、これもまた生存証明の表現とも言えるだろう。

メンバーは多様である。

N氏はウィルソンのプロファイルという超厚ラケを使い、手首の内転を上手につかった強いフラットサーブを武器にしている。全盛期にはメンバーの中で最速サーブだった。うまく面を合わせてのボレーも得意である。顔面に近いボールには「銀幕のスターの顔を狙うとは」とやり返す。客商売で身につけたものか天性のものかその会話は楽しくにぎやかである。長く御母堂の介護をし、また家族についての話の中に周囲への気配りとその優しさを感じさせてくれる。

O氏は、ドロップボレーの名手である。ボールを包み込むようにネット際にボレーする。その絶妙な技は「おさわりショット」と評され女性にもてると言われる O 氏のさもありなんショットとして見事というほかはない。ただしこのドロップボレーは、少し長くなると相手のチャンスボールとなるリスクもある。それでも、ドロップショットにこだわるのが O 氏らしいところである。野球経験者で肩が良く回りきれいなフラットサーブが決まるときもある。また、うまいものへのこだわりは半端でなく日本全国から名産を取り寄せたり、朝テニスよりさらに早朝、市場まで買い出しに行くなど、とにかくタフな行動派である。

S 氏のテニスは独特である。体の向きと異なる方向にボールを打つのでコースを読むことがはなはだ難しい。とにかく実戦でポイントを取るということから身についたものだと思う。基礎練習を経ればもっときれいなフォームになったろうが、これはこれでポイントゲットできるので大きな長所である。はじめて対戦する相手は特にとまどうだろう。脚力もあるので球際に強く、粘り強くミスなく返すスタイルは味方ならば信頼感があるが、相手にするとやっかいなタイプである。仕事柄、自社のセンサー点検に全国に出張する。そのセンサーは山奥にも有り熊対策にハンターも同行するのだという。ごくろう様です。

T 氏のお宅はコートに近く、ドリップしたコーヒーを持参してくれる。皆 T-C A F E と呼んで楽しんでいる。とにかくマメでフットワークが軽い。時間があると奥さんと車で全国を旅するという。そのテニスはストローク主体である。フィジカルも強く、よく回転の乗ったボールが伸びてくる。以前は前衛アタックが多く見受けられたが、経験を重ね考えた配球をするようになった。怖いもの知らずのポーズも気持ちよく決まることが多い。比較的、一本で決めようとするショットが多いので 4 ゲーム先取のルールでは、ややリスクを抱えたテニスとなる。とにかく行動的で様々なものに興味のある T 氏にとってテニスはその一つなのであろう。

K 氏は若いとき県の B 級に昇格。その片鱗がある。誰も皆同じだが調子のいい日、悪い日があり K 氏もその例に漏れない。鮮やかに決まるときもあるが、なんでそうなるのと言う場面もある。以前はやや足が不調であったが七十才を越えてからどうしたわけか良く動くようになり拾えぬボールが拾えることで球際に強くなったという。それが散り際の輝きとならぬよう願うばかりである。我々の年齢になると視力や記憶力も弱くなりカウント忘れや微妙なアウトセーフの判断もおぼつかないと前述した。そんな時 K 氏の一言は強くぶれない。現役の会社員であったときはやり手であったろうと推察する。今の K 氏は年金生活で夏休みや冬休みには多くの孫に囲まれる。「孫は来てうれしい、帰ってうれしい」とうれしそうに話す。テニス以外にも長い登山歴があり日本百名山全山登頂達成まであと数山

という。ブドウや野菜などK氏の農園でとれた作物をいただくこともある。売り物にできるほど見事な出来である。

H氏のテニスは基礎が身につけており安定感がある。ショートテニス、ボレーボレー、クロスストロークなど基礎練習を経てゲームに入る。我々マスターズにはその過程を経ることは本当に大切。いきなりゲームでは怪我のリスクもありできれば基礎練習から入りたい。H氏が来たときはなるべく基礎打ち相手となってもらおう。H氏は高校時代からテニスをし関東大会にも出場、現在も実業団に属し活躍しているという。年相応に膝の故障に悩まされ膝サポーターは彼のトレードマークである。

T氏は定年退職し毎朝来るようになった。車へのこだわりが強く車高を低くしマフラーを替えステッカーを貼った気合いの入ったスバルBRZに乗っていた。テニスは、バックスイングを大きく取った懐の深いストロークでそのコースを読ませない。また振らないボレーが身につけており安定している。朝のメンバーが帰った後もサービスやストローク練習を繰り返す。熱心で凝り性は車と同じである。車以外に1600ccのハーレーを所有しバイクツーリングも趣味と云うのだから人生を楽しんでいる。

M氏はコート年間定期券申請のまとめ役である。メンバーの中では若い方である。若いと言っても六十代だが比較的若いからだろうかサーブやストロークのスピードは速い。その体の動きも軽快。見事なポーチボレーも見せる。とにかく性格が表れるテニスだが無理のないきれいな球筋はジェントリーなM氏そのものを表している。とはいえ、ときより角度のついたショートクロスボールが飛んで来るから油断できない。仕事に余裕ができたからと、月の後半は遠方に一人住む親の面倒を見ていると言うから孝行息子である。

K氏は高齢者の中でも最古参である。若い時B級に上がったというだけあって70代後半のK氏のテニスは面を合わせるきれいなテニスである。さすがに足が弱ってきているが、ラケットが届きさえすればそのボール扱いは安定してうまい。特にバックのスライスはその長さを自在に調整しドロップ、短い弾まない返球など多彩である。ベテランだがショットの工夫、ラケットへのこだわりなど熱心で、あのジミー・コナーズも使用していた面の小さなラケットT2000を持参し、「面の中央で捉える練習」と使っていた程である。T2000は40年前のラケットなのである。体のあちこちの不調を語りながらも朝テニスに来るK氏もまたテニスの魅力に取り憑かれている。

S氏は度々この朝テニスにつきあってくれる。つきあってくれるとしたのは元A級で飛び抜けた技術を持っているからである。ミスをする原因を指摘してくれる。テニスより汗をかきに来ていると思えるほど汗をかく。前夜に飲んだ酒を抜くのだという。薄いラケットからのスライスは滑るように足下で弾み返球が難しい。そして最後はボレーで決められる。若いとき身につけた技術は衰えないものだ。

K氏は、まだ40代。夏も冬も沢も岩もやる山男である。コートに来るたびに新たな山行の様子を語る。そのコースは上級者向きだから何事もない山行を祈るばかりである。さて、テニスはとにかくボールが速い。バズーカストロークと評させるフォアハンド。浅くなればそのストロークが炸裂しなすべがないのである。打てるときは打つのが良い。それが若さだ。無理に我々にあわせる必要もない。でもそこは一人では勝てないダブルス。つねに我々の完敗と言う訳ではないから面白い。

他にも、元A級の大御所C氏。いまやラケットを竿に持ち替え溪流釣りに励む。また大先輩M氏は野菜作りのプロ。ときより収穫物がコートベンチに並ぶ。惜しくも他界したが

教え好き、教え上手だった T 氏は、ボレーの名手だった。あのテニスを見ることはもうできない。そして、テクニシャンの左利き N 氏。フォアのトップスピン、両手バックハンドのさえる S 氏。攻めのテニスが真骨頂の M 氏。スキーの名手、たまにテニスの Y 氏。今も現役で県大会にも挑戦する U 氏。土曜日の早い時間に来る安定したストロークの持ち主 Y 嬢。そして、いつも二人の優しいレディースペア N 嬢と K 嬢。

皆、愛すべき朝テニスの面々なのである。

朝、4時30分 今日も枕元のiPhoneが鳴った。手を伸ばして音を止める。めっきり弱くなった膝を上から手で押しながら立ち上がる。柱をつかみスリッパを履く。台所のロールパンを1つかじりながらカーテンを開けるとすでに外が白んでいる。良い天気になりそうだ。「今日もできるか」とつぶやきながらトイレに行く。自動で開く便器のふたが今日も朝の挨拶をしてくれる。短パンをはき、靴下・Tシャツを着ながら徐々に目が覚めてくる。「今日もいくか」とテニスバックのポケットに財布・免許証・携帯・キーを押し込む。そして最後に確認する。いつもニューボールを1缶入れておくことにしているからだ。買ったばかりのアシックスのシューズに靴べらで丁寧に足をいれる。玄関を開けると空は明るい、今日も暑くなりそうだ。ラケットバックをスバルG4の後席に放り込みエンジンを始動する。水平対向の始動回転数は高いからやや音が大きい。まだ5時前だ。こんな時、ハイブリッドやEVであったらと思う。途中NHKラジオ深夜便を聞きながらテニスコートに向かう。番組の最後は「二度と来ない今日という日を大切に」で締めくくられた。5時を過ぎた頃、コートわきの駐車場の定位置にG4を止める。自販機で冷たい飲み物を買ってコートに入ればもう数名が打ち合っている。4人目が私のような。「待ってました」と呼ばれ、買った飲み物を少し流し込みテニスバックから名刀ならぬ使い古した愛用のラケット neomax2000を取り出しコートに立つ。こうしてまた今日の1日がテニスからはじまる。いつまで出来るだろうとかすかに思いながら。